

R 労災かわらばん

— 初秋号 —

Vol.32 発行日/平成23年9月20日 編集/釧路労災病院新聞局

福島第一原発出張記



副院長
宮城島 拓人

震災津波そして原発事故。多くの被災民が地元で復興の槌音を響かせているなかで、ひっそりと静まりかえった地域があります。福島第一原発から半径20km圏内の放射能汚染地域です。しかし、まさにその中心で必死に作業している集団がいるのは余り知られていません。原発事故を収束すべく集まった何千人の東電そして協力企業の作業員たちです。彼らの健康管理を誰がするのか？国の出した結論は労災病院群と産業医大がやれることでした。勤労者医療を標榜している医療集団にこそ相応しい仕事だと言うのでしょうか。

その命を受けて7月初旬、私は釧路労災病院の派遣医師第一号として単身その中心に降り立ちました。あまりにも有名になった頭が吹き飛んだ1号棟や2号棟が間近にみえる免震重要棟が私の任地でした。被曝を最小限にするために、白いタイベックス（特殊な紙でつられたつなぎ服）をまとい、ゴム手袋をはき靴にはビニール袋を巻きつけ、毒ガスマスクのようなフルフェイスマスクを装着してバスで向かいます。建屋の周りでは宇宙人よろしく同じような格好をした人々が黙々と作業をしています。

しかし夏の炎天下では、その格好で一時間居るのが精一杯。汗だくになり、脱水になって免震重要棟に戻ってきます。ですから医師としての一番のケアは熱中症対策です。疑いのある人は、医務室で体を冷やし、経口電解質補液を投与します。中には点滴が必要な人も。しかもただでさえ放射線のために一度に長くは作業出来ない場所です。免震棟には入れ替わり立ち替わり外部と行き来する作業員で溢れています。

そして夜、東電の社員は作業場で雑魚寝です。その密集のなかで、当然のように風邪を引き、寝不足で頭痛を訴えます。三度の食事は魚肉ソーセージやカロリーメイト、菓子パンが主食ですからこれも当然のように腹をこわしたり便通異常が出てきます。それを持ちのわずかの薬品でしのぐのがまた現地の医師の役目です。あまりに過酷な労働条件で黙々と作業する人たちに私は愕然としました。と同時に、原発を推進してきた東電社員と言えども彼らもまた被害者だと思わざるを得ませんでした。彼らの健康管理に少しでも役に立つなら、誰がやるという議論は別としてもこの任務は継続しなくてはいけないと強く感じながら福島を後にしました。追伸；私の被曝量は一日70マイクロシーベルト程度です。レントゲン検査をちょっと受けたようなものでした。

災害支援ナースとして 東日本大震災の活動を通して



看護部手術室
桑名 久江

私は災害支援ナースとして4月6日から9日まで気仙沼市の避難所：気仙沼総合体育館にて支援活動を行ってきました。

避難所の約1100人の被災者の方を対象に、DMAT（全国から派遣された所属団体の違う医療・福祉のスタッフとチームになり、他職種（行政担当者・自衛隊・消防・警察）NPO・ボランティアと活動することができました。赤ちゃんから多くの高齢者がいた中、被災者の健康管理や急病への対応、巡回慰労チームや現地医療機関との連携をしながら、重症化や感染症拡大の防止に向けた活動を実施しました。

避難所到着時、異様な臭いの中、段ボールで仕切っただけの空間でプライバシーも保たれない状況で生活されている現実を目の当たりにして、ここが日本なのかと動揺しました。余震が続く中、毎晩寒い思いをし硬い床で不安な夜を過ごす辛さは壮絶だったと思います。被災された方々の不安・不満・恐怖心は計り知れなく、更に私の言動によっては不快な思いや憤りを感じるのでと対応に悩みました。3月11日の震災後最大の余震（震度6）が4月8日深夜にあり、真っ暗な中、転倒

等の事故防止の為にヘッドライトを点け館内をいつも以上に細かくラウンドし声かけをしました。「私たちの為に遠い釧路からこんな危ない所にわざわざ来てくれてありがとう」「看護師さんが24時間居てくれるからなんかあっても安心だよ」と皆さんから感謝の言葉を頂き、災害支援ナースが滞在する事が人々の安心感につながったと、あらためて災害支援の役割を学ぶ事ができたと考えます。

この4日間は日常の勤務体制とは違い、疲れたら仮眠する程度（それも寝袋）でほとんど不眠不休、食事する余裕もなく気力体力でなんとか持ったという状況でした。しかし事故もなく無事に支援活動を終了し釧路へ帰還する事が出来ました。今まで勤務先の病院での経験、救急や災害の研修や訓練をうけた事が、どれだけ役に立ったのか。今回はただ任務をこなしただけだと思います。しかし、同じ経験を共有した仲間と活動出来た事は今後の励みになります。そして、退職・勤務交代・新規採用と多忙な4月に、支援に行かせてくれた手術室の皆さんに感謝しています。



▲ 宮城県看護協会の方々

▼災害支援ナースとは
災害支援に関する研修や訓練を受けており、被災者に適切な医療・看護を提供できる看護職。個人でも、都道府県看護協会へ登録可能です。

から通っている被災者なのかもと、とても身近な人に起こった事となりました。派遣先から戻った東京は、節電でネオンや灯りが落とされてるのに、素直に共感でき、スカイツリーが上に向かって建築途中なのを見て前向きになれました。しかし、一夜明けた東京の朝、ホテルの窓から見えるこの風景は変わりなく、川の両岸に桜が咲いていて、車が走り綺麗な身なりの人々が普通に歩いている。釧路へ羽田の飛行中の上空から、今回派遣された東北の地震や津波、火災の跡が眼下に広がっている。錯覚ではなくすべて現実。復興にはまだまだ時間が必要で。私たちの当たり前が日常がどんなに幸せなことか。傷ついた人々が安らぎを得るのは支援し続ける事。踏ん張って耐えている被災地の事を忘れない事です。